



BBC

BE*BOY COMICS

THE MAN CALL

ツァーレ
皇帝と呼ばれた男・上

NOVEL / 水戸ルイ
COMIC / 東野裕

THE MAN CALL



^{ツァーリ}
皇帝と呼ばれた男・上
水上ルイ／東野 裕

CONTENTS

^{ツァーリ}
皇帝と呼ばれた男 COMIC
3

^{ツァーリ}
皇帝と呼ばれた男 NOVEL
67

冬の別邸にて
175

My Fair Boy ～^{ツァーリ}皇帝の試着室～
189

二人の慰安旅行 前編
～日本の温泉旅館にて～
193

“THE MAN CALLED“Царь””
Presented by RUI MINAKAMI
YOU HIGASHINO

皇帝と呼ばれた男

プロシア——イリーナ美術館

びじゅつかん

とうとう
来たんだ!!

美大生時代から
いつか訪れたいと
思い続けてきた
イリーナ美術館

やっと実物
を見る事ができる



インペリアル・エッグ——

プロシアの歴代皇帝の血筋

ラフマニノフ家に

受け継がれてきた

秘蔵の芸術品



なかでも

プロシア最後の皇帝が

自分の息子に贈ったエッグは

『ラスト・インペリアル・エッグ』と呼ばれ

ラフマニノフ王朝

価値のある宝物とされている

その実物は

ラフマニノフ皇帝直系の

子孫以外誰も

目にした事はない——

オトコ
来た男



皇帝陛下

ツァーリ

よ

Rui Minakami © You Higashino

今学期の授業は
これで終わります

皆さんも
良い冬休みを

明後日からの冬休み
ロシアへ旅行に行くって
本当ですか!?

香坂先生っ!!

うんっ!

『インペリアル・エッグ』の
実物を見るのがずっと
僕の夢だったからね

ニニニ

きゅん♡



先生が一人で
海外へなんて
心配すぎるわ!!

エッグの話してる時の
先生って
頬なんか染めちゃって
めちやくちや
色っぼいんだからっ!!



もう!
また
そんなこと——
僕は女の子じゃ
ないんだからね!!



美大生時代に
『インベリアル・エッグ』を
題材にした本を読み

僕はすっかり
その魅力に
取りつかれてしまった

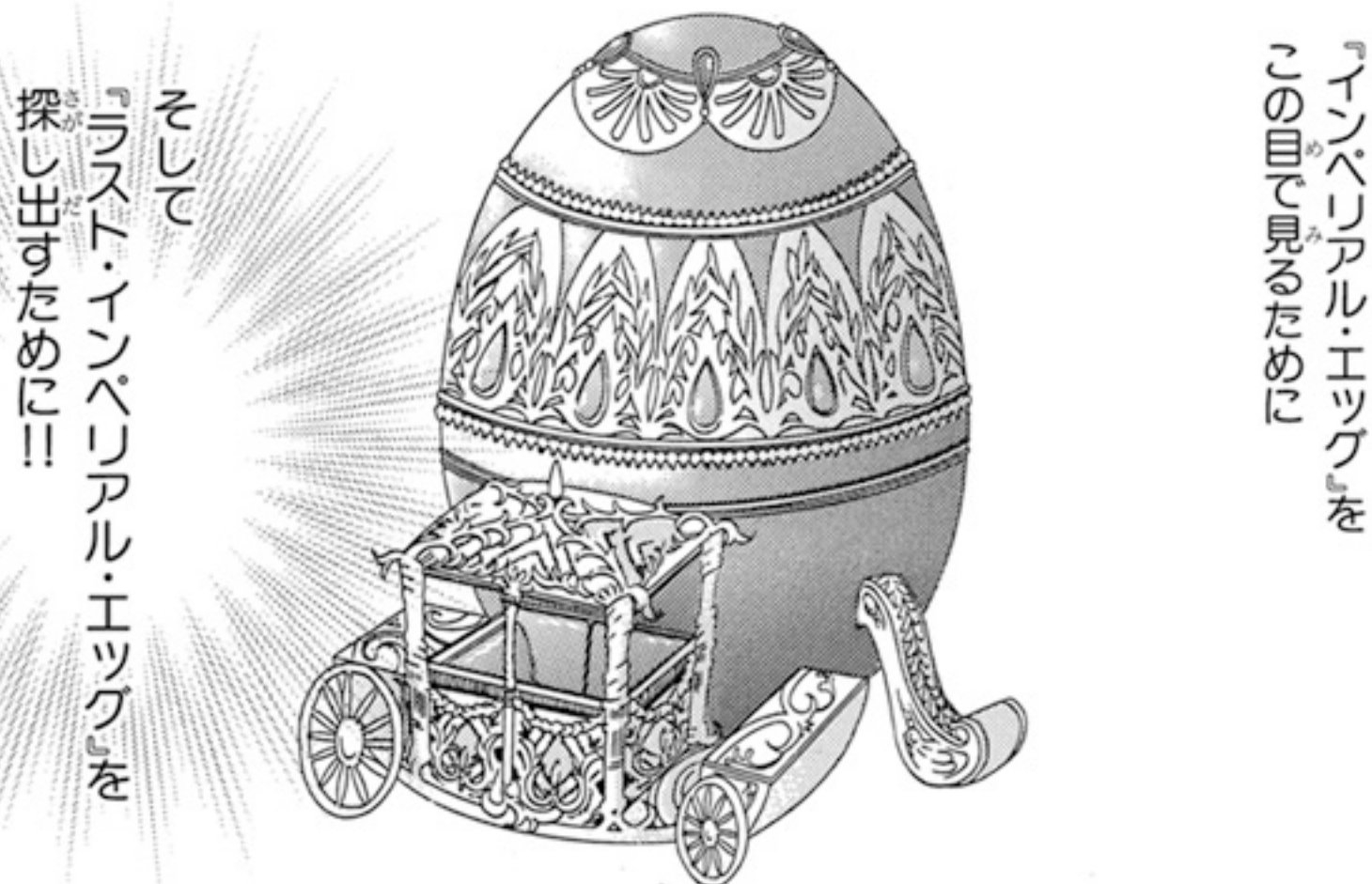
中でも
僕が一番興味を持ったのは
最後の皇帝が
息子に贈ったという
『ラスト・インペリアル・エッグ』



色とりどりの
宝石を散りばめた
美しいエッグ



そして
講師の給料を溜めて
やつとインペリアルへ
やって来た



『インペリアル・エッグ』を
この目で見るために

そして
『ラスト・インペリアル・エッグ』を
探し出すために!!



これが本物の
「インペリアル・エッグ」

すごい…っ!!



もつと
近づくと



!?



待って下さいっ

僕は――

!!!



何をしている!!



どろろろろろ!!!



皇帝!!

待て!!



かれ
彼を放すんだ!!

ツァー
皇帝陛下!

なんて
鋭い瞳

氷原を駆ける
獰猛な野生の狼のような
エメラルド色

カツ

カツ...

「皇帝陛下」……?

大丈夫か?

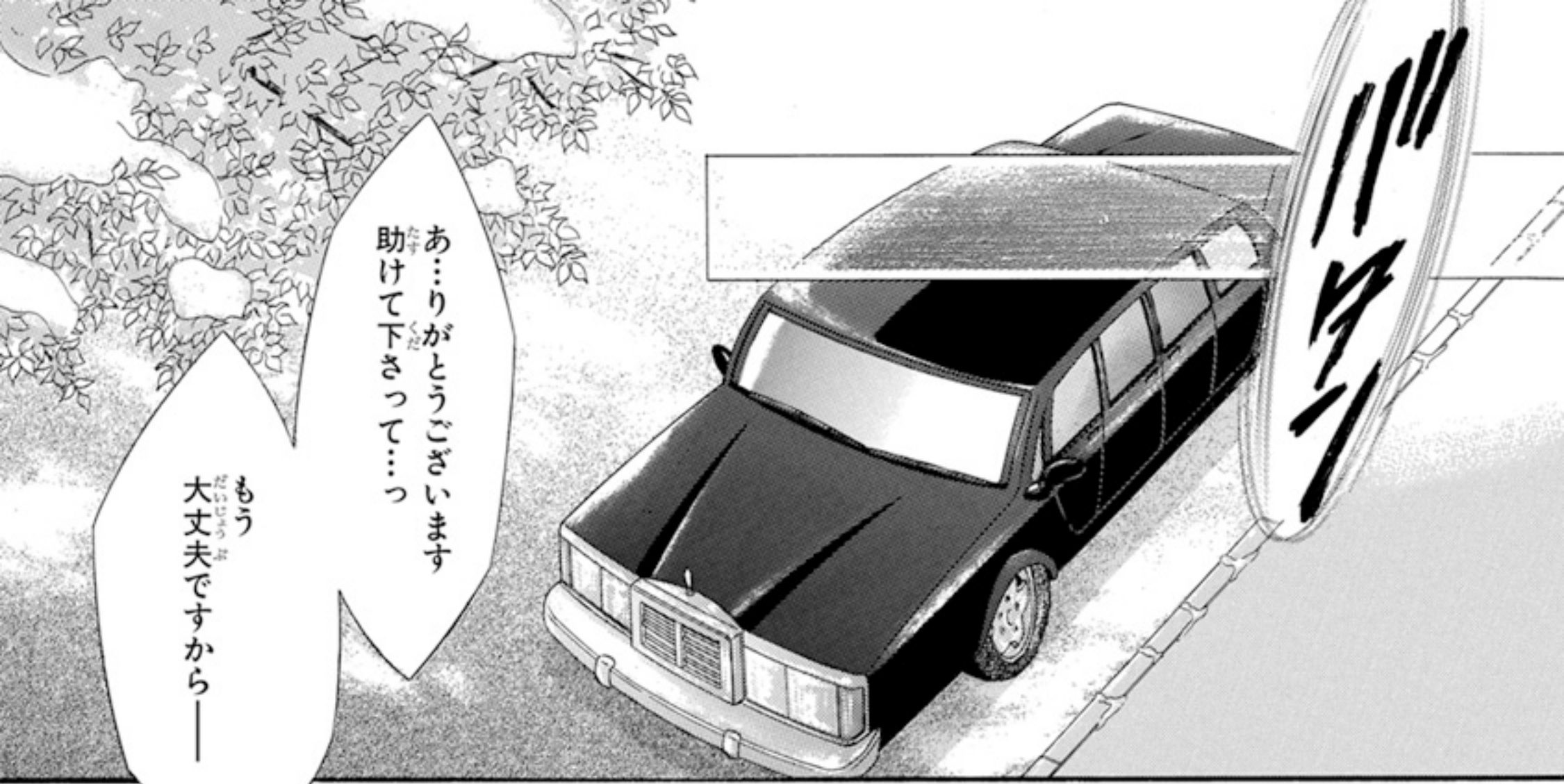
王朝が崩壊した今
「皇帝」なんて——

何かひどいことを
されてはいない?

……っ

ここにいると
落ちついて
話もできない

とりあえず
私の車へ行こう



あ……りがとうございます
助けて下さって……っ

もう
大丈夫ですから——

この国の政情は
まだまだ不安定で

軍部が権力を
握っている

そのせいで警備兵も
威圧的になりがちだ

手荒な歓迎をして
すまなかつた

いえ
そんな——

僕は——



我慢がまんしないで
いい——

…怖こわかった
だろう

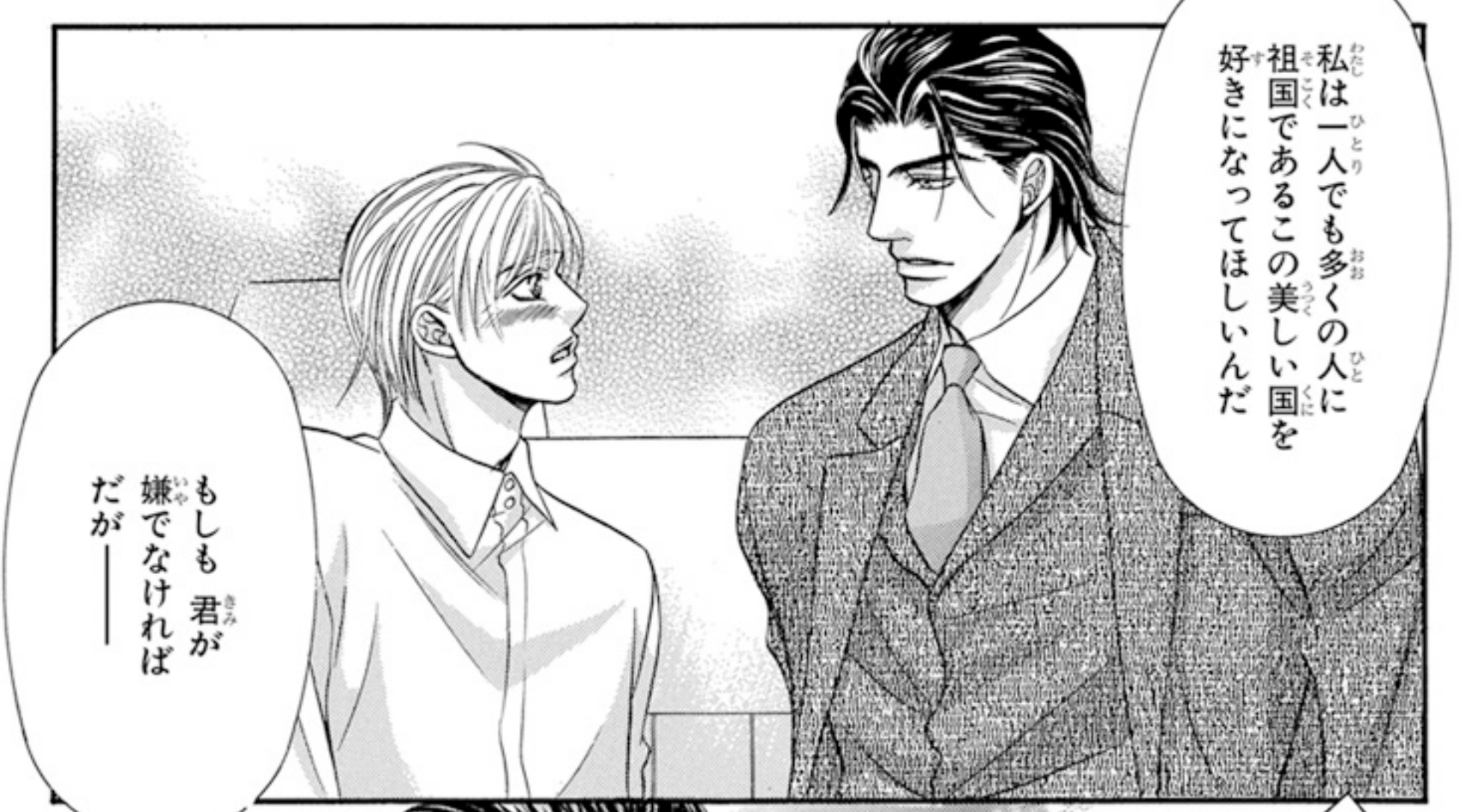
…

うっ…

っ…









私は一人でも多くの人の
祖国であるこの美しい国を
好きになってほしいんだ

もしも君が
嫌でなければ
だが――



嫌だなんて
とんでもない……っ



それなら
決まりだ

とても嬉しいです
でも――

ふっ……

じゅん



皇帝と呼ばれた男

1994年10月

おと

一糸まとわぬ裸の彼が、身体にシーツを巻き付けた僕を、後ろから愛おしげに抱きしめている。

天井まで切られた窓の外、遙か下界には、煌めく東京の景色が広がっている。

鏡のようになった窓ガラスに、僕と、僕を後ろから抱きしめる彼の姿が映ってる。

僕の華奢な身体に回るのは、長く、しなやかな筋肉が浮き上がる、彼の逞しい腕。

まるで彫刻のように完璧な美貌を、ベッドサイドスタンドのオレンジ色の光が、美しく染め上げている。

「君の住む街は、とても美しい」
彼が、静かな声で囁く。

ガラスに映る彼の美貌に見とれてしまった僕は、ガラス越し、ふいに視線を合わせられて思わず赤くなる。

彼の男っぽい唇の端に、胸が切なくなるほどにセクシーな微笑が浮かぶ。

「そして、そうやって恥ずかしそうに頬を染める君は、もっと美しい」

彼の手が、僕の腕を撫でるようにして上がり、シーツに包まれた僕の肩を包み込む。

初めて彼に愛の行為を教えられてから、まだ日が浅い。愛撫に不慣れな僕の身体は、その手がほんの少し滑るだけで震えてしまう。

彼の手が、僕をそっと方向転換させる。見下ろしてくるのは、雪原を駆ける狼のように獷猛なイメージの、エメラルド色の瞳。

身体に巻き付けたシーツ越し、肩を包み込んだ彼の大きな手のひらが、とても熱い。鼻孔をくすぐる、芳しい彼のコロン。

さつきまで感じていた狂いそうなほどの快楽が脳裏に蘇り、身体の奥が甘く疼く。

「愛している、アキト」
「……僕も愛しています、アレクセイ」

かすれた声で囁き返した僕の頬を、彼の長くて美しい指が愛おしげに撫でる。

「私たちは、もうすぐ、離ればなれになる。そしてまた、しばらく会えない」

その言葉に、心臓が壊れそうに痛む。
「そう……ですね」
「名残惜しい。とても」

ともすれば冷たく見えてしまうほど端正な彼の顔に、つらそうな影がよぎる。

「昼も夜も共にいて、いつでも君を抱きしめていられたら、どんなに素晴らしいだろう」

「……アレクセイ……」
「……ああ、僕も……」

僕は心の中に湧き上がる圧倒的な寂しさを感じながら思う。

「……あなたといつでも一緒にいられたらどんなに嬉しいか……」

思っただけで、いきなり涙が溢れてしまいうるようになる。

「……いけない。僕は唇を噛んでそっと彼から顔を背ける。」

「……彼は、世界を駆けめぐって仕事をする多忙な実業家。そしてそれだけじゃなく、たくさんの方の支持者を持つ信じられないほど高貴な生まれの人。」

「……どんなに寂しくても、引き留めたり、ワガママ言ったりしちゃいけないんだ。」

僕の名前は、香坂彰人。

都内にある美術大学の彫金科で講師をしている、二十五歳。

研究課題はプロシアの皇室に代々伝わってきた高価な宝飾品『インペリアル・エッグ』だ。

そして彼の名前は、アレクセイ・ニコラエヴィチ・ラフマニノフ。二十八歳。

世界に名だたる大富豪で、大企業・ニコラエヴィチ・グループの総帥。

実はなんと……プロシアを長年統治していたラフマニノフ皇室の末裔。世が世なら、プ

ロシア皇帝だったはずの人だ。

アレクセイとは、一カ月ほど前、本物の『インペリアル・エッグ』を見るために訪ねたプロシアで出会った。

そして、さまざまな出来事を経て……今は恋人同士になった。

……彼のような高貴な人と出会えただけでも信じられないのに、まさか、こんなふうにも肌を寄せ合う関係になるなんて。

僕は寂しさをこらえながら思う。

……だからせめて、彼の邪魔をしないようにしなきゃいけないんだ。

僕は顔を上げ、無理やりに唇に笑みを浮かべてみせる。

「あなたはとてもお忙しい方ですから。僕、こうして時々お会いできるだけで光栄です」

「アキト？」

僕は身体に巻き付けたシーツを掻き混ぜて彼の手の下から逃れ、急いで踵を返す。

「そろそろお出かけの準備をした方がいいですよね？ お風呂にお湯をためてきますから少しだけ待って……」

バスルームに向かって一歩歩いたところでききなり後ろから腰を抱き寄せられる。

「……あつ！」

驚きのあまり手から力が抜け、身体に巻き

付けていたシーツがふわりと宙に舞う。

慌てて手を伸ばすけど、彼はそれを許さず裸の僕の身体をやすやすと引き寄せる。

「……ア、アレクセイ……！」

「いけない子だ。この私にそんなふうにした仕打ちをするなんて」

生まれたままの姿で抱きしめられて、僕の肌が、彼の身体に押し付けられた。

いつの間にか尖ってしまっていた僕の乳首が、彼の熱い肌に微かに擦れて……身体に甘い電流が走る。

「……んっ……」

さんざん欲望を搾り取られたはずの中心が、また、ツキン、と甘く痛んで硬さを持ち始めてしまう。

……ああ、ダメ。

……なんて恥ずかしい、僕の身体。

「あの、アレクセイ、お風呂に……」

身じろぎして逃れようとする僕の腰を、彼の大きな手がしっかりと抱き寄せる。

「もうすぐ別れの時間だというのに、私を追いやるうとするのか？ それとも……」

彼が身を屈め、僕の耳に口を寄せる。

「……一緒に風呂に入ろうと誘っている？」

彼のセクシーな吐息が、耳元をくすぐる。

身体を走った快感に、僕の唇から勝手に甘

い声が漏れてしまう。

「……んん……違います……っ！」

「そんな色っぽい声を出して。やはり誘っているようにしか聞こえない」

彼が囁いて、耳たぶにキスをする。

「……やっ……ダメ……っ！」

否定の言葉は言ったけど……僕の身体は勝手にどんどん熱くなっていく。

「……ああ、ダメです……あなたの、飛行機の時間が……っ！」

「プロシアはとても寒い。祖国に帰る前に、君のあたたかさを、心に刻み付けたい」

囁かれる、セクシーな美声。

間近にある彼の唇を、意識してしまう。

見た目はこんなに男っぽくて野性的に見えるのに、彼の唇はとても柔らかく、そのキスはとてもセクシーだ。

今夜、彼はその唇で、僕の唇に数え切れな

いほどのキスを与えてくれた。

僕はそれだけで陶然としてしまったのだけれど、ベッドでの彼のキスは、唇だけにはとどまらず。

僕の、首筋に、肩に、胸に……そしてとても恥ずかしいところまで……彼は余すところなく、その美しい唇で愛の印を刻んだ。

彼のキスの感触を思い出し、身体がジワリ

と震える

と熱くなる。

「とても色っぽい顔をしている。キスを誘うような顔だ」

まるで心を見透かされたようなその言葉に、僕は羞恥のあまり泣きそうになる。

「……君が欲しい」

切なげな声で囁かれたら、僕の身体がツキンと甘く痛み、蕩けそうになる。

「……アレクセイ……」

……ああ……あんなにしたのに……

僕はさらに赤くなってしまいがら思う。

……また、身体がこんなに……

「顔を上げて、目を閉じなさい」

低い声で囁かれる甘い命令に、鼓動がどんどん速くなる。

僕は恥ずかしさをこらえて彼に向かって顔を上げる。そして、そっと目を閉じる。

「キスが欲しい？ 欲しいならそう言って」

囁かれて、僕は思わずうなずく。

「……あなたのキスが……欲しいです」

彼が、間近でクスリと笑う。

「いい子だ」

彼は僕を抱きしめ、そっとキスをする。

「欲しいのは、キスだけ？」

唇が触れたまま甘い声で囁かれて、僕の最

後の理性が四散してしまう。

「……あなたが……欲しいです。あっ！」

いきなり抱き上げられて、僕は驚いてしまう。彼は、飢えた獣が獲物を運ぶように僕をベッドに運び、そのまま性急に押し倒す。

「愛している、アキト。君が欲しい」
見つめてくるのは、獰猛で美しい瞳。

「……愛しています。あなたが欲しい」
僕の身体が、狂おしく抱きしめられる。

彼が、獲物に食らいつく狼のように、僕の首筋に、甘く、獰猛に、歯を立てる。

僕はそのまま彼以外のすべてを忘れ……

※

「まうたそんなに色っぽく頬を染めて！」
横からいきなり聞こえた声に、物思いに耽っていた僕は驚いて飛び上がる。

「そんなエッチな顔をしてると、研究室の床に押し倒されちゃうぞお！」

ここは僕が勤めている大学の彫金研究室。

講義がない時間や研究論文を書く時に使う、自分のデスクの前だ。

顔を上げると、すぐそばに桑田准教授の顔があつて、僕はまた驚いてしまう。

彼は二十七歳。この美術大学の卒業生で、僕の職場の先輩にあたる。

軽い感じのハンサムで、学生たちに人気がある。研究者としても尊敬できる人だ。

ただ、スキあらば、僕をこうしてからかうところが玉に瑕といつか……

回転椅子を滑らせていつの間にか近寄ってきていたらしい彼は、背もたれに肘をつき、その上に顎を載せて僕の顔を見上げてる。

「だけどなあ……あゝあ」
言つて、なぜか深いため息。

「恋する乙女って顔だ。香坂先生には、好きな人ができちゃったんだらうなあ」

「えっ？」

僕はさっきまで思い返していたアレクセイとの甘い時間のことをまた思い出し……一人で赤くなる。

「す、好きな人だなんて、そんな……！」

「好きな人でもないなきゃ、そんな悩ましい顔するもんか。ああ、悔しいなあ！」

「何が悔しいのかな、桑田くん？」

ドアの方から声がして、この研究室の長、小野田教授が入ってくる。

もう定年間近というお歳だけど、矍鑠とした感じの紳士。

だけどスーツの上に羽織った作業着代わりの白衣にはところどころに油絵の具が付いていて……いかにも美大の教授って感じた。

「私に研究論文をこきおろされたことが悔しいのか？」

「そんなのいつものことですから！ そうじやなくて、香坂先生に恋人ができたらしいことがですよ！」

「く、桑田准教授！ そんなことを教授にまでおっしゃらなくても……！」

真っ赤になってしまった僕を見下ろし、小野田教授が平然とした声で言う。

「香坂くんは恋人ができたことくらい、私はどうにお見通しだよ」

「えっ？」

「この間、上野の美術館での『インペリアル・エッグ』展に行ってから、ずっと様子が変わった」

教授の言葉に、僕はドキリとする。

……たしかに、その日、僕はアレクセイと再会したんだ。

「美術展の会場で、『インペリアル・エッグ』

好きの美人とでも知り合ったんだろう」

「ええ？ で、恋人同士になったとか？」

「私はそう見たな。どうだ、香坂くん？」

「……ええと、その……そんな感じですよ」

僕の言葉に桑田准教授は絶望的な声を上げ、小野田教授は勝ち誇ったように笑う。

……ごめんなさい、本当は少し違うけど、

今はそういうことにさせてください。

僕は二人を見ながら思う。

……まさか、僕が知り合ったのが男性で、しかも、『インペリアル・エッグ』の持ち主にあたるラフマニノフ皇家の末裔だなんて、誰も、夢にも思わないだろうな……。

「あの、教授。来週のテスト休暇のことで、お話があるのですが……」

僕は、前から計画していたことを教授に話すことにする。

「テスト休暇？ ああ、わかったぞ」

教授はいたずらっぽい顔になって、

「五日間のテスト休暇の後、君は二日ほど講義のない日があったな。続けて一週間の休暇にして、恋人と旅行にでも行く気かな？」

「あつ、すみません、あの……」

いきなり言い当てられてしまって、僕は思わずたじろいでしまう。

「講義がなくても、再来週に迫った教授の個展の準備とか、いろいろと仕事はありますよね。すみません、勝手なこと……」

落胆しながら言う僕に向かって、教授は、

「どこに旅行に行くかを教えてくれたら、休暇の許可をあげてもいい」

「本当ですか？ あの、プロシアに行こうと思っ

っているんです！」

僕が言うと、教授は目を丸くする。

「またプロシアに？ そんなに簡単に渡航許可がおりたのかい？」

「あ……」

プロシアは政情が不安定で、研究者とはいえそう簡単に渡航許可が下りることはない。

……実は、アレクセイが手を回してくれたんだけど、正直に言うわけにいかないし……。

「いえ、あの……恋人が渡航許可を取っていて、僕はその同行者ってことで……」

言うのと、教授は納得したようにうなずいて、

「なるほど。なかなかない機会だろうからしっかり勉強してくるんだよ。……休暇はもちろん許可するよ」

「あ、ありがとうございます！」

「知り合つてすぐに、女の子とプロシア旅行なんて。香坂くんもなかなかやるな」

「あ、いえ、その……」

……来週には、アレクセイに会える！

僕の心は、喜びに震えていた。

その時の僕は、まさかあんなことが起こるなんて……夢にも思わなかったんだ。

アレクセイ・ラフマニノフ

「皇帝。今朝はご機嫌麗しいようですねにより」